

風 雪 の き の こ 採 り

平成 16 年 3 月 1 日の採集日誌より

高橋 勝雄

きのこ採集日誌を記して 7 年、雪の降る中でのきのこ採りといえば、「浜占地：ハマシメジ」を採集したことがまず頭に浮かぶ。それは年末と新年が明けた 1 月の二度であった（前ページ写真は平成 10 年 1 月 10 日に 3.1 kg の大収穫があった時のもの）。

3 月は春の訪れと云うが、関東地方に於いては雪が降るのは珍しくはない。ここに記す日誌も丁度そんな気象条件の時の事でした。

夜半より降り出した雨は朝になっても止む事は無く、寧ろ北東の風に吹かれ次第に強くなっている。天気予報も程なく雪に変わると云う…。朝食をとった後も何故か落ち着かない。何故か… 2～3 日前、私が『裏路の切木』と名付けたヒラタケの城を訪れた際、沢山の幼菌が発生していた。…もう適度に成長してはいないか…思案は続く。

重い空模様を見上げ、「よし」と外出を決心する。リュックに軽い飲食物を入れ駅に向かう。電車に乗り暫くして外を見れば、雨は何時しか雪になっていた。25 分後、下車駅に着く。一步外に出ると北東の風を雪混じりの冷たい雨が容赦無く全身を包み囲む。こんな悪天候に一瞬のためらいが脳裏を走る。

…暖かい電車に乗り、帰ってしまおうか…少し弱気になる。しかし、ヒラタケの紫色の柔かい姿が脳裏に浮かび、重い足取りも何時しか忘れ、吹き付ける風雨（雪）の中を先へ先へと歩いていた。

家並が切れ田圃道となり、風雪はさらに強

く、全身は冷気に包まれてゆく。そして足元の地面は徐々に白くなり、枯草は綿帽子をかぶっている。歩き始めて一時間が過ぎ、山里の数少ない家並の間の坂道を登る。5センチ程積った路は歩き難い、手に持っていた雨具が次第に重くなる。バサッと何度も振り落す。程なく樹林の小径になる。風もなく静寂の世界が続く…。しかしそれも長くは続かない。亦風雪の吹き付ける田圃道となる。程なく道が交差している。その中央は小高く土が盛り上がり、中には一本の老木が、風雨などに耐え、永い年月を生き抜いているようだ。一榎木― その樹令は凡そ 300 年位、幹の至る処枯れ朽ちている。我人生の何倍も行き続ける老木、何時知れずに濡れた手袋をとり、冷たい樹肌に触れ、一時、無の心境を味わう私でした。

雪が降り続く中、やっと今日の目的地であるヒラタケの城に近づく。身丈もある枯草に積る雪を振り払い、掻分けると、ヒラタケの城は春雪に埋もれていた。高鳴る胸の鼓動を鎮めつつ積った雪を手で払い除けると、其処には紫色をしたヒラタケの群生があった。手先の冷めたさも忘れ無我夢中で採集をしていた。「自然の恵みよありがとう」…今日は悪天候の中を来た甲斐があった。若菌を約 1 kg、この時季に於いては大量の収穫と云える。私は意気揚々と足取りも軽く、雪の山里を後に駅に向っていた。